

文学部における「Advanced English」

—タスク学習の実践—

エモリ・キャシー、ダグラス・ジャレル

“Advanced English” in the Faculty of Literature: An Example of Task-Based Learning

Kathi EMORI and Douglas JARRELL

1. はじめに

「Basic English 1,2」と「Advanced English 1,2」という4つの英語科目は名古屋女子大学文学部と家政学部の両学部を対象とする「全学共通科目」であるが、ここ数年は、外国人教師の担当になるコミュニケーション重視の科目になっている。英語教育FDの一環としてこれらの科目の現状把握を行った際、授業内容に一貫性が見られなかったため、その改善に着手した。前報では1年生の「Basic English 1,2」の改善について述べたが、本稿では2年生対象の文学部における「Advanced English 1,2」について行った改善について述べることにする。

2. 「Basic English 1,2」で目指す英語運用力

「Basic English 1」では、学生が日本語を使わずに、身近な話題について英語で5分間連続して話せる目標を設定している。授業中の主な活動は、滑らかさに焦点を置きながら①正しい質問文の作り方、②正確な答え方の練習を行うことである。前期終了後に、学生が自信を持って会話の口火を切ったり、話す相手に適切で関連のある質問をしたり、会話を打ち切ったりすることができることを目指している。「Basic English 2」では、会話の基本的能力を強化しながら、学生が話の中に20-30秒ほどのエピソードを加えられるように指導していく。このような短いエピソードは「Advanced English」のタスク学習への橋渡しになる。「Advanced English 1」では人間ではなく物に焦点を当てることにより、話し手と聞き手の間に口頭のやり取りが生まれる。

3. タスク学習及び言語習得による研究

まず教育学上のタスクの定義を下に示す。

“a piece of classroom work that involves learners in comprehending, manipulating, producing, or interacting in the target language while their attention is focused on mobilizing their grammatical knowledge in order to express meaning, and in which the intention is to convey meaning rather than to manipulate form.”

「言語形式を操作するというよりむしろ意味を伝える意図があり、意味を表現するために文法知識を動員することに注意を向けることで、目標言語で理解したり、操作したり、発言したり、やり取りをしたりさせるような教室内作業」(Nunan 2004: 4、ジャレル訳)。

さらに、タスク学習は次の原則に重点を置く。

- ・(授業) 内容の選択は(学習者) ニーズに基づく
- ・目標言語でのやり取りを通じての言語習得を重視する
- ・学習環境にオーセンティックテキスト(実物教材)を導入する
- ・言語形式のみに焦点を当てるのではなく、言語習得にも焦点を当てる機会を学習者に与える
- ・個人の経験の充実感を図ることは、教室での学習に重要な役割をもつ
- ・教室内の言語学習と学外の言語使用をリンクする(Nunan 2004: 1、ジャレル訳)

有力な研究者が薦めるタスクの種類は多くあり、メタ言語の分類も多岐に渡る(Nunan, 2004; Willis, 1996)。タスク学習を通じて教えられるコミュニケーション・ストラテジーとしてNunanがリストアップしたのは、認知的、対人的、言語的、感情的、そして創造的なストラテジーである。これらのストラテジーが含まれるタスクをやらせれば、外国語の使用に役立つ、バランスの取れたストラテジー・レパートリーが学習者に構築される。

最も初期の頃にタスクの構造を考察したシャベルソンとスターンによると、タスクを作成する際には、次の点を考慮すべきとしている。

- ・内容：教えられる授業の内容
- ・教材：学習者が観察できたり、操作することができる物
- ・活動：授業中、教師及び学習者が実際に行うこと
- ・目標：教師側から見たタスクの主な狙い
- ・学生：学生の能力、ニーズ及び興味が重要
- ・社会的な集団：クラス全体とその集団性の意識(Nunan 2004: 40、ジャレル訳)

タスク学習の大きな特徴は、従来の教授法と異なり、目標言語で活動をしてから初めて言語形式に焦点を当てることにある。そのため、タスクの作成するにあたっては次の7つの要素を組み込む必要がある。

1. scaffolding - 「学習者を独力では達成できないゴールに到着させるための外的支援のことである」(石井・三輪2004)
2. task dependency - 一回の授業の中で、次のタスクが前のタスクから生まれてくる
3. recycling - 教授内容の再利用により言語習得の可能性を最大に高める
4. active learning - 最も言語習得が進むのは、学習者が積極的に言語を使う時
5. integration - ことばの言語形式、コミュニケーション機能及び意味を総合的に教えるべき
6. reproduction to creation - 繰り返す練習から創造的な練習へ学習者を促す
7. reflection - 学習プロセスを考える機会を与える (Nunan 2004: 35-38、ジャレル訳)

「Advanced English」のタスク学習は、上記の概念に基づいてできた科目で、「Basic English」の延長線上にあるものとして考えられている。「Basic English」は「簡単な会話が英語でできるようになる」を到達目標として掲げており、「Advanced English」のタスク学習では、学生

のコミュニケーション能力をさらに向上させ、意味中心のタスクへ展開させることになる。

4. 「Advanced English 1」の進め方

「Advanced English 1」は、次の4つのタスクタイプを中心に構築された科目である。①描写、②物語（体験談）、③取り扱い方の説明、④役割練習。「描写」というのは、基本的に絵や物の説明である。「物語」というのは、主に学生自身の体験を語ることである。「取り扱い方の説明」というのは、（携帯電話など）物の取り扱い方を説明する。上記の3つのタスクと異なり、「役割練習」というのは2人以上の学生が協力し合う対話形式のタスクである。役割練習の場合、指定された場面における会話を作ったりするタスクであるため、タスクを示す前に2人の学生が協力して準備する必要がある。上記の4種類のタスクを採択したのは、本学の学生の現在のレベルに最も相応しく、それに見合ったストラテジーを育成するには最も適切だと考えたからである。

「Basic English」同様、最初の授業で、15回の授業を通じてどのような力が付くかという明確な到達目標を提示する。学生全員に配布されるチェックリストには、授業の目標、進行、評価の仕方などの説明が載っている。「Advanced English 1」で習得すべきスキルは質問形式で書かれている。

1. 4種類のタスクを使って自分について語ることができますか？
2. 授業で紹介されたタスクをすべてできましたか？
3. 授業中教師が取り上げた誤りを見つけて、訂正することができますか？
4. (英語で) 授業における自分の成果を評価できますか？

半期科目である「Advanced English 1」は、3週間のタスク・サイクルから構成されている。15週の学期中、1週目はシラバスや授業の説明、最後の2週間は「Basic English」同様口頭試験、自己評価や個人面談に当てられる。残りの12週間は、3週間のサイクルが4回繰り返される。つまり

第1週目：教師によって指定されたタスク

第2週目：教師によって指定されたタスク

第3週目：学生が選択したタスク

1つのタスク・サイクルで1種類のタスクを3回繰り返すことにより、新しい表現や単語の再利用が行われ、言語習得の可能性を最大に高める。第3週目でタスクの選択を学生に任せるのは、個人の経験に基づいてタスクに取り掛かれれば、タスクに対する集中力が増え、言語習得がより効果的なものになるとの考えに基づく。

タスク学習の場合は、学生の評価は筆記試験だけで決まることはなく、まず学生のノート、さらにタスクの最終試験の結果、取り上げられた誤りに関する試験の結果、授業での積極的な態度及びタスクの下準備によって決定される。

ノートに書かれるのは、本人のプレゼンテーションのメモ、ほかの学生の話した内容に関するメモ、授業中に出てきた誤りなどである。このノートは成績をつける時大変参考になる。ただし、文学部における「Basic English」に関わる前報にも書いたが、「Basic English」も「Advanced English」もともに果たす役割は言語面の向上だけではない。

他人から新しい情報を得、だんだんと知り合いが増えていく、全学生に関するメモ

をノートに記入するように指示すれば、全員を相手にすることになり、英語の授業はウィリス(Willis)の言う「社会的な交流の場」になる。

(ベネマ、ジャレル、108)

タスクに関する最終試験では、学生が1人またはペアで教師に指定された4種類のタスクのうちの一つを再現させる。学生に事前にタスクを知らせなかったり、学生に試験で行うタスクを選択させたりするなど、運用方法は教師によって異なるが、一つのタスクを再現させるのは共通である。学生が言語形式にも焦点を当てられるように、誤り訂正の筆記試験も実施する。

5. 「Advanced English 1」のタスク・サイクルの例

ここまでタスク学習の内容をやや抽象的に説明してきたが、なじみのない教授法だけに明確な実践例を示したほうがよいであろう。そこで3週間のタスク・サイクルをここで紹介する。

第1週目：教室の説明

1. プレタスク：黒板に次の文を書く。「This is a large room facing east. It's about 12 meters by 8 meters, and there are blackboards at both ends.」学生がペアになって教室についての詳しい説明を書き始める。教師は教室を回りながら、追加情報を求めたり学生が知りたい表現や語彙を教えたりする。
2. タスク：学生は、書かれた説明を持って新しいパートナーとペアを組む。互いに書いた内容を読み上げる。聞き手は、確認のため、指摘された場所へ行って説明された内容を指で指す。聞き手の行動により話し手が理解されているかどうかを明確にすることができる。
3. 言語形式に焦点を当てる：教師が場所や物を指し、学生に説明を求める。教師がここで新しい表現やよくある誤りを教える。

第2週目：絵や写真の描写

1. プレタスク：教師は簡単な絵について口頭で説明する、学生はそれを聞いて想像しているイメージを描く。学生が描き終えたら、教師は黒板に説明を描写した絵を描き、学生は自分の理解度を確認する。
2. タスク：学生がペア作る。教師は異なる絵をペアの数だけ用意し、各ペアに一枚を与える。学生は絵の説明を書く。新しい相手と互いに絵の説明をし合って、聞き手は聞いた内容を絵に描く。出来上がった絵と元の絵を見比べることによって、描写による伝達が成り立ったかどうかを確認する。
3. 言語形式に焦点を当てる：教師は学生の使えない表現、よくある誤りについて説明を行う。また、次回の授業のために教師によるプレタスクの説明文を配布し、復習するように指導する。
4. 次回の授業で、学生に自分の好きな絵及び写真を持ってきて説明してもらうため、絵・写真とその説明文を用意することを宿題とする。

第3週目：

1. プレタスク：教師が好きな写真を口頭で説明し、学生がそれを簡単に絵で描くか、描く難易度によっては、連想したイメージと本物とを比較する。
2. タスク：学生が持ってきた写真について説明し、聞き手ができる限りそれを絵で描く。

3. 言語形式に焦点を当てる：学生の使えない表現、よくある誤りの説明を行う。時間が許す限り、相手を組み替えて、新しいペアで写真の見せ合いを続ける。

6. 「Advanced English 2」の概略

「Advanced English 1」の目標は、4種類のタスクを行い、各タスクに必要な語彙や表現を習得することである。「Advanced English 2」では、学生が「Advanced English 1」で行ってきたタスクの実用性を見つけ出すことが狙いである。「Advanced English 1」と異なり、どのタスクを使うかは教師に指定されないが、学習者自身が複数のタスクを統合しながら、指定されたトピックについて少人数グループで多角的にプレゼンテーションをすることが求められる。

家族、友達、旅行、テレビ、映画、音楽、スポーツ、趣味、個人的な経験、人生の目標など、さまざまなトピックが用意されている。トピックの選択は各教師に任されているが、すべて学生にとって身近なトピックであることは共通している。教師によっては学生の意見を取り入れてトピックの選択を行う場合もある。トピックが設定された後、学生はグループに分かれ、プレゼンテーションのために必要な小道具、内容、適切な英語表現などをブレンストーミングしながら決めていく。プレゼンテーションの内容の対象になる小道具を選択するのは、最も重要なポイントである。話す内容を書き出して読み上げることは、コミュニケーションを阻害する行為だと考えられる。原稿を読み上げると、聞き手と目を合わせることもなく、聞き手の理解度を確かめることもない。まして、聞き手とやり取りできる環境も与えない。小道具を使って話す場合は、聞き手にそれを示すことがポイントになり、アイコンタクトを取りながら相手の理解度の確認ができる。「小道具」は、写真でも趣味で使うものでも、話の内容の対象になる物であれば何でもかまわない。話す内容を書いて読むことを防ぐために、話し手に話す内容はメモ程度でノートに記入し、プレゼンテーションの時に参照することを薦めている。

7. 「Advanced English 2」の進め方

「Advanced English 1」同様、「Advanced English 2」も3週間のタスク・サイクルから構成されている。15週の学期中、1週目は授業紹介に当て、最後の2週間に口頭試験、自己評価、個人面談を実施する。その間の12週間では、3週間のサイクルが4回繰り返される。

第1週目：トピックの設定、ブレンストーミング、プレゼンテーションの準備

第2週目：プレゼンテーションの第1ラウンド

第3週目：プレゼンテーションの第2ラウンド(欠席した学生がいる場合)、第1ラウンドに出てきた問題点の処理、ノートの点検、プレゼンテーションの評価など。

言語は一発勝負で習得が達成されるものではなく、同じ表現を繰り返すことによって習得が進むものと考えられている。タスク・サイクルの第2週目には、意味を中心とする言語活動を数回繰り返すことになっているので、学生の言語習得を促進する適切な活動であるといえる。科目紹介で学生全員に配布されるチェックリストには、授業の目標、進行、評価の仕方の説明が載っている。「Advanced English」は「Basic English」同様、学生の学習者としての責任が明確にされている。欠席が多い学生は不合格となるし、出席している学生でも宿題をこなさないと不合格となる。また、2回プレゼンテーションをしない学生は、自動的に不合格となる。

第2週目のプレゼンテーションの時間にやむなく欠席した学生が出た場合は、不合格にする根拠はないため、第3週目にもプレゼンテーションができるようにタスク・サイクルが構成されている。

「Advanced English 2」では、習得すべきスキルを次の質問形式で学生に知らせている。

1. トピックについて原稿を読まずに5分間プレゼンテーションができますか？
2. 「Advanced English 1」でこなした4つのタスクを含めたプレゼンテーションができますか？
3. プレゼンテーションを聞いて詳細なメモを取ることができますか？
4. プレゼンテーションを聞きながら適切な質問ができますか？
5. プレゼンテーションの質を評価することができますか？

チェックリストから分かるように、「Advanced English 2」で求められる能力は「Advanced English 1」で求められる能力よりさらに高度である。タスクを統合する能力以外にも、プレゼンテーションを聞きながら内容及び表現に関する質問ができる能力が求められる。話し手と聞き手のやり取り（インタラクション）を促進することによって、よりコミュニケーション志向のプレゼンテーションが可能になり、より自然な対話になる。「プレゼンテーション」という単語は誤解を招きやすいかもしれないが、この「Advanced English 2」でいう「プレゼンテーション」は、人に物を見せて話す程度の意味で使っており、論文口頭発表ほど形式ばったものでは決してない。「Advanced English」の場合、聞き手の役割は聞くだけでなく、「active listener」（積極的な聞き手）として、話し手の言ったことに対して意味を明確にしたり詳しい情報を求めたりする責任がある。

聞き手は詳細なメモを取る能力も求められる。従来の外国語教育では言語形式にこだわり、内容に焦点を当てない授業が多く見られたが、タスク学習では情報交換が成立しないと授業は成り立たない。意味中心の授業なので、相手に関する情報を収集することにより、Willisがいう真の「社会的な交流の場」になる。

「相手のプレゼンテーションの質を評価する」という項目を付け加えたのは、成績のために評価を求めるのではなく、むしろ話し手の長所と短所を評価する機会を与えるためである。これによって話し手は自分のプレゼンテーションを再評価し、それを向上させる結果となる。

評価のために、2種類の試験を設けている。最も良かったプレゼンテーションを再び行うことで、学生は自分のプレゼンテーションにさらに磨きをかけ、1人またはグループで発表する。教師が評価するタスク試験とよくある誤りについての筆記試験が一つずつ実施される。

8. 結論

「Advanced English」に新しい授業方法を導入してから2年が経過した。2006年度の「Advanced English 2」の学生による授業評価は高く、授業担当者の反応も良かった。しかし、同じ年度の「Advanced English 1」の授業評価及び授業担当者の反応はよくなかった。タスクが単発的で、到達目標がはっきりしなかったことが原因であると考え、上で説明した「Advanced English 1」のタスク・サイクルの進め方に変更した。今年度は「Advanced English 1」と「Advanced English 2」の関連性がはっきり見えるようになり、受講者の理解度や満足度が高まることが期待できる。「Advanced English」は、学生の授業による評価、非常勤講師を含む授業担当者のフィードバックに基づいて改善を行ってきた。今後もさらなる改善に向けて努力していきたい。

9. 参考文献

1. Nunan, D. 2004. *Task-based Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
2. Willis, J. 1996. *A Framework for Task-Based Learning*. London : Longman.
3. 石井成郎・三輪和久『プロセスの省察を軸とした創造性教育』(2004)
<http://www.cog.human.nagoya-u.ac.jp/~ishii/ronbun/jcss2003/jcss20033.pdf>
4. ジェムズ・ベネマ、ダグラス・ジャレル「文学部における『Basic English』」、名古屋女子大学紀要 人文・社会編 53号、2007年、pp.103-109.